哲学歴史学科 哲学コース

哲学コースってどんなとこ？

哲学は、およそ我々人間が問いうるすべてのことがらに関して、自由な理性的探究を行なう学問です。知識や存在についての根本的探究、倫理、宗教、芸術についての原理的考察などがその営みの中心を構成します。哲学は今も昔も、複雑に絡み合った思考のもつれを解きほぐし、新たな世界観の提示と有益な概念の創出を試みてきました。こうした知的努力の成果を広く深く学びつつ、それと同時に、現在の状況における重要な諸問題にどのように応答すべきかを考えていくことが哲学に課せられた使命です。哲学コースでは、自ら問題を形成し粘り強く考えぬく自立心と、偏狭な見方を避けあらゆる可能性に対して開かれた知性を育むことを目指しています。

佐金先生の研究について

研究内容は「時間」です。扱われる問題は多岐にわたりますが、一言でいうと「時間とは何か」について研究しています。しかし、単に時間といっても、我々が経験する時間もあれば、我々の経験を離れて流れる時間も存在します。そのとき、時間の流れとは何なのかという問題、また科学で扱われる時間と日常において前提とされる時間の乖離という問題も考える必要があります。たとえば、特殊相対性理論では、観察者の運動状態に依存して、何が今と同時かは観察者ごとに異なります。つまり、同時性は観察者の運動に相対的なものとして考えられています。たしかに日常的な場面では、この今と同時なものを考えるとき、それはだれにとっても同じと考えがちですが、実際には観察者ごとに違うということです。現在の絶対性と同時性の相対性ということの問題に加えて、よりSFに近い興味深いテーマとして、タイムトラベルは本当に可能かどうか、そこに時間の本性に反するような矛盾はないかということも目下検討中です。

講師
佐金（まこん） 武（たけし） 先生

おすすめの本・映画

『マトリックス』
（Lana & Lilly Wachowski）
『13F』（Josef Rusnak）
デカルト『省察』

二つの映画は哲学的な設定で、デカルトの「夢の懐疑」がモチーフとなっています。デカルトの『省察』は背景知識がなくても読めるので、映画とあわせておすすめします。

佐井さんの学びについて

3回生
佐井（さい） 鈴佳（すずか） さん

——コースに入ったきっかけ

私が小学生のときからずっとお世話になっている塾の先生が、インド哲学の教養がある人でした。その影響か、高校生のときの倫理が好きで、その気持ちは大学生になっても変わらなかったので、哲学コースを志望しました。

——コースに入ってからの気づき

人数が少ない分少し不安でしたが、きめ細かい指導を先生からいただけるので恵まれた環境です。哲学に関して予備知識がなくてもついていけます。哲学コースの先生方はとてもフレンドリーです！

また倫理が好きだったということもあり、倫理学を学ぼうと思っていたのですが、哲学コースの概論授業を受けてから、宗教学という分野に興味が変化しました。私の中では、これは大きな変化ですね。

哲学が生活に役立つという実感はあまりないですが、深く考えることはできるようになりました。哲学特有の「考える姿勢」は、日常生活に活かされていると思います。

おすすめの授業
哲学演習・講読

哲学演習・講読は、英語の哲学書を少人数の演習形式で読んでいく授業です。英訳をきちんとしていかなければ理解が難しく、大変な授業ではありますが、先生からの解説や質問によってより深い理解が可能になり、おもしろい授業なのでとてもおすすめです！

佐金先生にとっての「芸術」

哲学においては伝統的に「美学」と呼ばれます。そこで扱われるテーマは多岐にわたりますが、大きく二つの問いに分けて考えることができます。一方には、美の感性はいかにして可能か、いいかえれば、我々はどのようなときに美しさを感じるかという理論的な探求があります。他方、この美の感性の存在理由も問題とすることができます。すなわち、我々が美を感じることに一体どのような意義があるかというのがもう一つの問いです。

ただし、これらの問いは深く絡み合い、道徳などの社会規範や表現（表象）一般の問題とも密接に関連しています。また、コンセプチュアルアートのような、一見感性的とはいいがたい近・現代の芸術のあり方をいかに理解するかという課題は伝統的美学にとって大きな挑戦といえます。しかし、芸術そのものに関していえば、それは世界をどう捉えるかということに他ならず、ここには多くの哲学的洞察が含まれているはずです。

卒業論文 タイトル紹介

○人間への軽蔑と生の肯定
○「多数派専制」に対する J.S. ミルによる自由の擁護論について
○「ゾンビ論証」の妥当性

哲学歴史学科 日本史コース

日本史コースってどんなとこ？

日本史コースは、大阪に根ざした都市史・地域史を中心に、様々な時代やテーマで日本の歴史を学び、研究することのできるコースです。地域に残された生の史料（遺跡や遺物、古文書や行政文書、景観や聞き取りなど多様）をみなさん自身が紐解いて、過去の真実を解明する——この醍醐味を味わってください。歴史学は、過去の人間の多様な営みとその意味を、具体的に、かつトータルに明らかにする学問です。地域史以外にも、国家、政治・外交、戦争や国際関係、宗教、身分や法と社会、経済と文化など、幅広いテーマで本格的に学べるコースです。日本史コースには、考古・古代・中世・近世・近現代すべての時代の担当教員がおり、充実した指導が受けられます。

佐賀先生の研究について

私は生活文化や開発など大阪の近現代都市史の研究をしています。大阪という都市には、地域ごとの特色が色濃く見られます。大阪の様々な地域での生活や生産、開発の歴史あるいは、大阪の社会集団などについて研究を行なっています。工場、遊廓やスラム、居留地など、地域ごとの特色を明らかにする形で研究をしています。そのため、単に文献を読むだけではなく各地域にフィールドワークへ行き、現代に残る様々な近代の痕跡をたどり、調査することもあります。また、都市史の視点から遊廓について調べる延長として、「従軍慰安婦」の問題にも興味を持っています。

身近にある生きた史料を母語で読み、考えることができるのは日本史という学問の大きな特徴です。研究において、史料に基づいた推論も行ないますが、学んでいく中で想像を超えるような歴史の出来事が明らかになることがあり、日々好奇心を掻き立てられています。

教授
佐賀（さが） 朝（あした） 先生

おすすめの本

浅野秀剛・吉田伸之編
『浮世絵を読む (1) ～ (6)』
（朝日新聞社、1997 ～ 98）

題に「読む」とあるように、この本では単に浮世絵を見て楽しむだけではなく、その背景にある江戸の歴史的な社会を読み取っていきます。江戸の民衆の生き生きとした生活を感じてください。

小谷さんの学びについて

——コースに入ったきっかけ

高校のときから日本史が好きで、日本史コースに入ろうと思っていました。1回生のときに国際問題をあつかう授業を受けたのですが、この授業で日本から見た国際関係についてもっと学びたいと思ったのがきっかけです。

——コースに入ってからの気づき

高校のときまで歴史とは、過去についての完成されたストーリーとして与えられるものでしたが、日本史コースに入って、自分で考えることが要求される学問だなと感じました。授業で史料をもとにグループで話し合い、史料から何が読み取れるのかを考えていきます。基礎知識は必要ですが、史料を読み解き、論理的に考えていくことがより大事です。

コースに入ってから、江戸時代に薬売り業が発達していた地域を授業で訪れたところ、製薬会社が多く並んでおり、身近な歴史の名残が感じられました。また、普段ニュースを見るときなどにも資料の正確さを意識する姿勢が身につきました。

3回生
小谷（こたに） 真子（まこ） さん

おすすめの授業
日本史講読Ⅲ

日本史講読Ⅲは、毎年9月に和泉市で行なっている合同調査で得た「生」の史料をあつかい、寺や村、水利といったテーマごとに班に分かれて考察する授業です。史料からわかる情報を正確にあつかい、論理的に考証するのはなかなか難しいことですが、班で何度も話し合い、発表を重ねることでひとつの見解に辿り着けたとき、その達成感はひとしおです！

佐賀先生にとっての「芸術」

歴史学は、芸術とは縁がなさそうに見えますが、さにあらず。芸術も歴史社会の一部として時代の中から生まれます。歴史学では、芸術の表現形態や作品に込められた意図を探るだけではなく、それを産み出した時代や社会の特質にも目を向けます。例えば、江戸時代の浮世絵は、巨大都市江戸に存在した歌舞伎芝居、遊廓や庶民の生活、彼らが楽しんだ風景や名所を画題としています。1コマの絵の背後には、多様で複雑な社会関係があり、じつは浮世絵を生産・流通させる出版界そのものが複雑な分業とそれに携わる絵師や版元、摺師や彫師など多様な人々に支えられていました。浮世絵に日本史研究がアプローチする際には作品論に加え、こうして作品を成立させた社会的関係やその歴史的特徴にもメスを入れ、トータルにそれを明らかにすることが可能です。過去の芸術作品は歴史を超えて現在も私たちを魅了してくれますが、歴史を超える作品も、じつは歴史の中で生まれる——これがおもしろいところなのです。

おすすめの授業
日本史講読Ⅲ

卒業論文 タイトル紹介

○古代日本における天命思想
——奈良時代の恩赦を中心に——
○大坂天満宮をめぐる社会的諸関係
——六月祭礼を中心に——
○芸娼妓解放令後における石川県の遊所統制